法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

日本の遊戯療法における「セラピストが子どもと一緒に遊ぶ」かたちへのV. M. アクスラインの影響を探る : F. H. アレン、E. ドルフマン、H. D. ジノット、C. E. ムスターカスにも注目して

丹羽, 郁夫 / Niwa, Ikuo

(出版者 / Publisher)
法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
THE BULLETIN OF THE FACULTY OF SOCIAL POLICY AND ADMINISTRATION : Reviewing Research and Practice for Human and Social Well-being : GENDAIFUKUSHI KENKYU / 現代福祉研究
(巻 / Volume)
22
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
73
(発行年 / Year)
2022-03-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025440

＜論　文＞

日本の遊戯療法における「セラピストが子どもと一緒に遊ぶ」かたちへのV. M. アクスラインの影響を探る
－F. H. アレン、E. ドルフマン、H. D. ジノット、C. E. ムスターカスにも注目して－

丹　羽　郁　夫[1)]

【抄録】 本研究の目的は、セラピストが子どもと一緒に遊ぶ、日本の遊戯療法のかたちへのV.M. Axlineの影響を調べることである。その方法として、Axlineだけでなく、その影響に関与した可能性があるF.H. AllenとE. Dorfman、H.D. Ginott、C.E. Moustakasの著書についてもその記述を調べた。その結果、Axlineは一緒に遊ぶことを支持していなかったことがわかった。Axlineは日本の遊戯療法の形成に最も影響していたが、一緒に遊ぶことを避ける彼女の考えは日本に取り入れられていなかった。この要因は2つ考えられた。第1に、Axlineの考えが日本で認識されなかったこと、認識されても、その重要性が理解されなかったことである。これにはAxlineの著書の記述の仕方とAxline以外の著書の影響が考えられた。第2に、Axlineの考えの実施が難しかったことである。今後の課題として、遊戯療法に関する日本の初期の文献などを調べることで、一緒に遊ぶかたちが日本の遊戯療法に形成された要因をあきらかにすることを提示した。

【キーワード】 遊戯療法　　アクスライン　　文献研究　　歴史　　日本

はじめに

子どもの心理療法は、遊びを用いるため、プレイセラピーや遊戯療法と呼ばれる。子どもが遊ぶことから、その遊びにセラピストがどの程度かかわるかは遊戯療法における関心事のひとつである。本書で取り上げるFrederick H. Allen（フレデリック・H, アレン）は、今から80年ほど前、子どもの遊びにセラピストがかかわる程度を質問されることが多いと述べた（Allen, 1942）。この点に関して、日本の遊戯療法では、セラピストは子どもと一緒に遊ぶことが指摘されている（竹内, 2019）。つまり、セラピストは子どもの遊びの中に入り、遊び相手になる。具体的には、ごっこ遊び、ちゃんばら、サッカーや野球、ゲームなどを一緒にする。したがって、子どもの遊びの内容にセラ

1) 現代福祉学部

ピストが直接影響するかかわり方をする。日本の遊戯療法に関する書籍（安島, 2010; 飽田, 1999; 深谷, 1971; 弘中, 2002, 2014; 東山, 1982; 東山・伊藤, 2006; 河合・山王教育研究所, 2005; 村瀬, 1995, 1996; 永井, 2005; 佐藤・山下, 1978; 玉井, 1976; 田中, 2011; 丹, 2019; 吉田・伊藤, 1997）には、以上あげたような、セラピストが子どもと一緒に遊ぶ場面が記載されている。日本心理臨床学会や日本遊戯療法学会のそれぞれの学会誌に掲載されている事例研究も、全体的に同様の傾向である。このように日本の子どもの心理療法では、セラピストが子どもと一緒に遊ぶことは「ありふれた」（東畑, 2017）かたちである。

しかし、このかたちは子どもの心理療法全体には当てはまらないことが指摘されている。木部（2006）は、精神分析の Klien（クライン）派ではセラピストは子どもと一緒に遊ぶのを避けると述べ、一緒に遊ぶ日本の遊戯療法を批判した。一緒に遊ぶことが遊戯療法の一般的な方法でないとしたら、日本のセラピストが子どもと一緒に遊ぶのはなぜだろうか？　筆者は、日本の文化に合った遊戯療法のあり方に関心をもっている。とりわけ、この一緒に遊ぶかたちに注目している。なぜなら、前述したように、子どもの遊びにセラピストが関与する程度は遊戯療法における関心事のひとつであるからである。また弘中（2014）は子どもと一緒に遊ぶかどうかは遊戯療法の実際に顕著な差をもたらすと指摘しているからである。日本の遊戯療法において、セラピストが子どもと一緒に遊ぶかたちが形成され、これが維持されているのはなぜか？　このかたちは日本の遊戯療法の実践をどのように特徴づけているのか？　これらの疑問に取り組むことは、日本の遊戯療法のあり方を検討するうえで重要な示唆を与えてくれると考える。そこで本研究では、セラピストが子どもと一緒に遊ぶかたちが日本でどのように形成されたのかを探る最初の一歩を踏み出すことにする。

１．子どもの心理療法を初めて試みた精神分析による遊びの導入

子どもに心理療法を初めて試み、そこに遊びを導入した精神分析が遊びにどうかかわったのかを紹介する。子どもに心理療法を初めて実施したのは、精神分析家である Hermine Hug-Hellmuth（ヘルミーネ・フークーヘルムート）である。彼女は精神分析を子どもに適用するにあたり、さまざまなことを試みた。そのなかで彼女は精神分析に初めて遊びを導入し、子どもと一緒に遊び、遊びを子どもの内的世界を理解するために用いた（Hug-Hellmuth, 1921; 丹羽, 2014）。子どもの心理療法は、セラピストが子どもと一緒に遊ぶことから出発したのである。しかし Hug-Hellmuth による子どもの精神分析の発展は、その不慮の死によって途絶えてしまう。彼女の死後、子どもの精神分析を大きく発展させたのは Melanie Klein（メラニー・クライン）と Anna Freud（アンナ・フロイト）である。2 人は Hug-Hellmuth のさまざまな試みの内、それぞれ別の側面を発展させた（Geissmann

& Geissmann, 1998; Plastow, 2011)。よく知られているように、2 人は鋭く対立し、遊びに関する考えも、その用い方も大きく異なっている。

Klein（1932）は、子どもの遊びにはその内的世界が象徴的に表現されているという Hug-Hellmuth の考えを重視した。Klein は子どもとごっこ遊び[1]をし、遊びから子どもの内的世界を理解し、それを言葉にした。その後の Klein の流れをくむ分析家たち（Klein 派）は、前述したように、子どもと一緒に遊ぶのを避けるようになった。Klein の弟子であり、その入門書を執筆した Segal（1973）も、子どもの遊びに「反応もしないで理解することにつとめる一人の伴侶」（岩崎訳, 1977, p.169）と、セラピストは遊び相手にならないことを述べた。木部（2006）は、一緒に遊ぶことの問題点に関して、「子どもが自分の不安から目を逸らすことにセラピストがただ共謀する」（p. 70-71)、「プレイが単なる欲求不満のはけ口になる」（p. 113)、「セラピストは常に投影性同一化に晒されているため、セラピストが患者の無意識的意図に繰られ行動する危険がある」（p. 117)、「セラピストが遊びに呑み込まれてしまい、観察しプレイの意味を考えるセラピストの機能が損なわれる」（p. 133）と述べた。

一方 Freud A.（1928）は、Hug-Hellmuth が子どもと一緒に遊んだことのみ受け継ぎ、遊びを子どもと関係を形成するためだけに用いた[2]。子どもの内的世界の理解には、遊びではなく、絵や夢などを用いたのである。しかし後に Freud A.（1946）は、“imaginative play”（p. 70)、つまり「想像的な遊び」に限定し、遊びを子どもの内的世界の理解に使用するようになったと述べている。

このように精神分析では、最初はセラピストと子どもが一緒に遊んでいたが、それを避ける立場と続ける立場に分かれた。この精神分析の一緒に遊ぶやり方が日本の遊戯療法に影響した可能性がある。しかし精神分析が日本の遊戯療法の形成に影響したことはこれまで指摘されていないことから、本研究では精神分析には焦点を当てない。

２．日本の遊戯療法に影響した V. M. Axline

日本の遊戯療法の形成を研究する際に踏まえておかねばならないのは、遊戯療法が日本で独自に生まれたのではなく、欧米で生まれたものが文献を通して取り入れられた点である（山崎, 1995)。いくつかの文献（例えば、弘中, 2014; Ogawa & Takai, 2017; 佐藤・山下, 1978 など）によると、

---

1 Klein（1932）は、ごっこ遊びで割り当てられた役割について、子どもから詳しく話してもらうと記述しているので、彼女が子どもの遊びの中に入って、その役を演じることは少なかった可能性がある。

2 Freud A. の考えを引き継ぐ現代の自我心理学でも、セラピストが子どもと一緒に遊ぶことは続いている。そして一緒に遊ぶことは、関係形成のためだけでなく、子どもの退行を許容し、その内的世界を表現するのを容認するためにも用いられている（Chethic, 1989)。

日本に遊戯療法が始まったのは第二次世界大戦後の 1950 年代後半から 1960 年代の初めであり、Carl R. Rogers（カール・R, ロジャーズ）のクライエント中心療法の著書とほぼ同時にその弟子である Virginia M. Axline（ヴァージニア・M, アクスライン）が執筆した "*Play Therapy: The Inner Dynamics of Childhood*."（1947）の日本語訳が出版されたことによる。そしてこの Axline のプレイセラピーが公立の教育相談機関を中心に日本全国に広がった。つまり日本の遊戯療法の形成には Axline のプレイセラピーの考えが大きく影響している（深谷, 1971; 弘中, 2014, 鵜飼, 2010）。したがって、セラピストが子どもと一緒に遊ぶ遊戯療法の日本での形成には Axline のプレイセラピーが影響した可能性が大きいと推測できる。

３．研究の目的と方法

以上より、セラピストが子どもと一緒に遊ぶ日本の遊戯療法の形成には Axline が影響しており、それは Axline の著書に一緒に遊ぶことを支持する記述が存在したからであるという仮説をたてる。そこでこの仮説を確かめることを本研究の目的とする。

研究方法は次の通りである。Axline の著書に焦点をあて、そこにセラピストが子どもと一緒に遊ぶことについてどのように記述されているのかを調べる。また Axline の 1947 年の著書が翻訳され日本で出版される少し前から、彼女の 1964 年の著書が翻訳され出版されるまでに、Otto Rank（オットー・ランク）[3] の影響を大なり小なり受けた、彼女と理論的に同じか近い立場の著書がいくつか日本で出版されている。これらの著書も日本の遊戯療法に直接影響した可能性があり、Axline の著書の理解に影響することを通して間接的に影響した可能性もある。そこで、Axline の 2 冊の著書だけでなく、これらの著書の記述についても調べる。具体的には、日本の遊戯療法に影響したと考えられる 6 冊の著書の日本語訳を、その原著が発表された順ではなく、日本語に翻訳され出版された順に検討を行う。まず、Axline より前に日本で出版された relationship therapy（関係療法）の Frederick H. Allen、そして Axline と同じ理論的立場にあった Elaine Dorfman（エレーヌ・ドルフマン）の著書を検討する。次に最も注目する Axline の著書を検討する。その後に Axline と理論的に近い Haim. G. Ginott（ヘイム・G, ジノット）と Clark E. Moustakas（クラーク・E, ムスターカス）の著書の検討を行う。

---

[3] オーストリアの精神分析家。フロイトから離れた後、パリに移住し、時々米国で講演を行った。彼の主体性を重視する考えは、関係療法とクライエント中心療法が米国に生まれることに影響したと考えられている。

４．研究結果―日本の遊戯療法に影響した可能性のある 6 冊の著書の検討―

（１）フレデリック・H. アレンの『問題児の心理療法』（1955）

Frederick H. Allen（1942）の “*Psychotherapy with Children*” を取り上げる理由は 3 つある。第 1 の理由は、この著者が日本の遊戯療法に直接影響した可能性があるからである。この著書の日本語訳の出版は 1955 年であり、Axline（1947）の和訳『遊戯療法』が出版された 1959 年よりも早い。Axline のプレイセラピーの考えが日本に紹介される前に Allen の子どもの心理療法の考えが日本に知られていた。実際に、日本で早期に出版された遊戯療法に関する書籍のほとんど（深谷, 1971; 高野, 1972; 高野・古屋, 1961; 玉井, 1976）が、この Allen の著書を引用あるいは参考にしている。Allen の関係療法に基づいた遊戯療法の実践報告もある（後藤, 1955; 長尾, 1955）。第 2 の理由は、Allen（1942）と Axline（1947）の著書には共通点が多い（古屋, 1966; 田中, 2015）ことから、日本での Axline の理解に Allen が影響した可能性があるからである。例えば、子どもには問題を解決する能力があると見なすこと、セラピストは子どもを変えようとしないこと、子どもが自分で決めてその責任を負うことの重視、制限が必要と考えることなどが共通する。理論の上においても、Axline の師である Rogers の来談者中心療法と Allen の関係療法はともに Rank の影響を受けていることから、この 2 つの立場は近い関係にある（Dorfman, 1951）。したがって、Axline も Allen と理論的に近い。第 3 の理由は、Axline（1947）は Allen（1942）の影響を受けつつも、それを修正して、発展させていることから、Allen と比較することで Axline の考えがより明確になると考えられるからである。以上より、セラピストが子どもと一緒に遊ぶことに関する『問題児の心理療法』の記述を取り上げ、これを検討する。なお、以下の引用とそのページは黒丸正四郎による 1955 年の和訳（第 1 刷）に従っている。

Allen は、セラピストが「子供の遊びにあまり積極的にしかも永く介入することはよくない」（p. 131）とし、「子供の遊びに介入するような事はせずに、自分の治療的役割を固く守り、子供を自由に遊ばせてお」（p. 216）くことを勧めた。彼はごっこ遊びについて、遊びの中で、セラピストが治療者の役割を離れ、子どもが投影してくるあらゆる役割を引き受けてしまうことを戒めた（p. 131）。セラピストが一貫性を失うと、子どもがセラピストから分化する過程を妨げてしまうと考えたからである。分化とは、子どもがセラピストとの違いを体験し、セラピストとは異なる一人格であると示すことである。Allen は、子どもの人格が母親と未分化な状態から分化し、その個人特有の形態を獲得することを「個性化」（p. 44）と呼び、「成長過程の中核をなす」（p. 44）と重視した。そして個性化の前提である分化を、親子関係だけでなく治療関係でも重んじたのである。

また、Allen は子どもが「自発的に遊びを選択」（p. 123）することを重視し、「僕何をしたらよい

の？」（p. 123）と尋ねる子どもを「自分のとるべき責任を治療者に負わせようとしている」（p.123）と述べた。そしてセラピストが子どもに「それは、君が決めることだ」（p. 144）と言う場面を記述している。しかし Allen は、子どもの自発的な遊びの選択を尊重するのとは違う、遊びを方向づける介入も記述している。彼はなにもしようとしない子どもにはセラピストから「将棋[4]をやろう」（p. 129）と言い、「将棋のようなゲームをやるのもよい」（p. 128）と述べた。その理由を、ゲームは「仲よくやれる遊び」（p. 128）であり、一緒に「何かをやるという機会をつくるので都合がよい」（p. 129）からとした。Allen は「治療関係が出来」（p. 145）るとして、一緒に遊んだのである。ゲームをした結果、12 歳の少女は「心がほころび次の時間には自ら能動的に動き始めた。しかもそれからは将棋でなく、他の遊びを始めたのである」（p. 129）と報告した。つまり、遊べない子どもを遊べるようにするために、関係が形成されるまではセラピストが子どもと一緒にゲームなどをすることが助けになると彼は考えた。遊びを方向づける他の介入には、セラピストが子どもの始めた鉄砲の遊びを「それがよいと励ました」（p. 134）場面がある。また、象や亀の玩具ではなく、「人形」（p. 140）で遊ぶように提案し、自己を投影する玩具をより現実に近いものにして「もっと有意義な遊び」（p. 140）に変える場面もある。

以上より、Allen はセラピストが子どもと一緒に遊ばない方がよいと考えていたことがわかる。とくに、子どもの個性化を妨げる点で、ごっこ遊びを彼は警戒した。しかし遊べない子どもに対しては、ゲームなどで一緒に遊ぶことが関係作りになり、役立つと述べるなど、状況に応じて柔軟に対応した。

（２）エレーヌ・ドルフマンの「遊戯療法」（1956）

Axline と同じ理論的立場にあった Elaine Dorfman の “Play Therapy”（1951）は、日本語訳が 1956 年に出版された『ロジャーズ選書 3』に所収されている。したがって、Dorfman のプレイセラピーの記述の方が Axline の『遊戯療法』より 3 年早く日本に出版された（原著は Axline の方が 4 年早い）。日本で早期に出版された遊戯療法に関する書籍の多く（深谷, 1971; 高野, 1972; 高野・古屋, 1961）が Dorfman を引用あるいは参考にしている。このことから、彼女の記述は日本の遊戯療法に直接影響したことと、Axline の著書の理解に影響したことが考えられるため、「遊戯療法」の記述を検討した。なお、以下の引用とそのページは友田不二夫による 1956 年の翻訳（第 1 刷）に従っている。

Dorfman の著書にはセラピストが子どもと一緒に遊ぶことに関する考えが記述されていない。しかし記載された事例の中の 3 つにセラピストが子どもと一緒に遊んだことが報告されており、その

---

[4] 原語は “checkers（チェッカー）”。ボードゲームのひとつであり、相手の駒を取り合うもの。日本では西洋将棋とも訳される。

肯定的な側面が述べられている。この 3 つの内、2 つはしゃべらない事例として紹介されたものである。12 歳の少年は「カルタ[5]をもってきて“戦争”をした」（p. 17）とあり、この遊びがセラピストとの「二人の関係の最大限であった」（p. 17）と報告されている。13 歳の少年は「その社会性が最高の状態にあるときでも、治療家と十文字並べ（tic-tac-toe）[6]をして遊ぶだけだった」（p. 18）とある。その後、この 2 つの事例はともに学校内での適応がよくなったと報告された。一緒にゲームをした点は Allen と共通しているが、2 つの点で相違がある。一つは、一緒に遊ぶことは、Allen の事例では子どもとセラピストの関係形成の出発点になっていたのに対し、Dorfman の事例では 2 人の関係の到達点になっている点である。もう一つは、Allen はゲームをセラピストが提案したのに対して、Dorfman の場合は子どもが求めた点である。Dorfman が一緒に遊んだ理由は、Allen がいう、関係形成を始めるためではない。Dorfman は「他の人が自分の私的世界に入るのを許さない子どもには、治療家だけがこのことを受容し、しかも干渉しようとしないということが、治療効果をもつのであろう」（p. 19）と述べた。すなわち Dorfman は、セラピストと子どもが一緒に遊ぶことを、子どもがかかわりをもとうとしないことを受容した結果生じた望ましい変化として捉え、それを受け入れたと考えられる。

3 つめの 11 歳のボッブ少年の事例（p. 40-44）では、子どもは粘土を天井にぶつけたい欲求をセラピストに止められたことから生じた怒りを、粘土で作ったセラピスト人形を攻撃する遊びで表した。これに対してセラピストは、子どもの感情を反射し、子どもの遊びの内容を言葉にしている。具体的には、「あんたは、とっても私がしゃくにさわるんで、すっかり叩きのめしちゃうのね」「もう私には手がないわ」「私は殺されちゃった」（p. 43）などと発言している。セラピストは「痛い」「やられた」のような遊びへの反応を言葉にせず、子どもの遊びの中に入っていない。その後、少年の方からの提案で、セラピストと「粘土のボールでおとなしくキャッチボールをして遊ぶ」（p. 44）とある。セラピストが子どもの怒りを受容したことによって、子どもが自分の欲求を譲歩できたと述べられている。つまり、一緒におとなしく遊ぶキャッチボールは、攻撃的な遊びからの望ましい変化であった。

以上から、Dorfman はセラピストが子どもと一緒に遊ばない方がよいと考えていたと推察できる。一方で、子どもがセラピストに一緒に遊ぶことを求めた場合、それが望ましい変化である場合は、それを受け入れて一緒に遊ぶのが適切であると考えていたことを、掲載された事例から読みとることができる。

5　原語は “a desk of cards” であり、トランプを指す。
6　「三目並べ」のことである。米国のプレイセラピーの文献に頻繁に登場する。

（３）ヴァージニア・M. アクスライン

Virginia M. Axline が Rogers の考えを子どもに適用した心理療法は、最初は nondirective play therapy（非指示プレイセラピー）と呼ばれたが、Dorfman（1951）から client-centered play therapy（クライエント中心プレイセラピー）、Ginott（1959）からは child-centered play therapy（子ども中心プレイセラピー）と呼ばれた（Johnson, 2015）。彼女の 2 冊の著書である “*Play Therapy: The Inner Dynamics of Childhood*.”（1947）と “*Dibs: In Search of Self*”（1964）のそれぞれの日本語訳である『遊戯療法』（1959）と『開かれた小さな扉―ある自閉児をめぐる愛の記録』（1972）は、日本で「遊戯療法のバイブルのように読まれた」（弘中, 2014, p. 17）とされる。特に前著は日本の遊戯療法に関する書籍のほとんどで言及されている。セラピストが子どもと一緒に遊ぶことに関する、彼女のこの 2 冊の記述について以下に検討する。なお、『遊戯療法』の引用とそのページは、小林治夫による 1959 年の和訳（第 1 刷）に従った。『開かれた小さな扉―ある自閉児をめぐる愛の記録』の引用とそのページは、岡本浜江による 1972 年の翻訳（第 1 刷）に従った。

１）『遊戯療法』（1959）

セラピストが子どもと一緒に遊ぶことについて、彼女の考えを直接記述している部分は 2 つある。仮説に反して、2 つともセラピストが子どもと一緒に遊ぶことを支持していない。

一つは、プレイルームでなにもせず、一言もしゃべらない子どもに関して、セラピストが「子どもといっしょにあそべば子どもが活動しはじめるだろう、と考え…媒体をえらんで…誘いかけ」（p. 125）ると「子どもはいつまでも治療者を頼りにして、治療期間にゆくゆくは打ち破らなければならぬ別の障害になる」（p. 125）という記述である。これは、なにもしない子どもにゲームを一緒にすることを提案した Allen に対する Axline の反論であろう。既に述べたように、Allen は子どもの遊びの自主性と子どもが遊びを決めて責任をもつことを重視したが、子どもの遊びをセラピストが方向づけることをいくつか記述している。Axline も、Allen と同様、子どもが「自分で決定を下さなければならない責任」（p. 37）を負うことを重視し、「子どもが先導するのです。治療者はそれについて行きます」（p. 163）と述べ、それを実践の上でより徹底した。Axline にとって、セラピストが遊ぶことを決め、子どもと一緒に遊ぶことは、子どもをセラピストに頼らせてしまうことであった。責任を重視する彼女の視点を踏まえると、それは子どもが遊びを決め、それを 1 人で行う責任を引き受けることを妨げてしまうことであったと考えられる。

もう一つは p. 163 の記述である。「治療時間は…子どもの時間です」「治療者は遊び仲間ではありません…共鳴板であって…子どもが自分のことをあるがままに見られる鏡」であると述べられている。その後、「治療者の意見や感情やガイダンスなどはみな治療時間外で保持されます」「子どもは

自分をよく知るために遊戯室に来ているのだから、治療者の意見や欲望などは無用なものだとわかります」「子どもは、あそびの中にはいり来んでくる治療者にわざわいされて、歩みをとめられてしまいます。したがって、治療者はあそびからぬけています」という記述が続いている。一読しただけでは分かりにくい文章だが、セラピストは子どもの遊びの中に入るべきではないと述べている。つまり、セラピストが子どもの遊びに入って、その意見や感情などを表わすと、共鳴板や鏡ではなくなってしまい、子どもが自分を理解することが妨げられてしまうと Axline は考えた。セラピストが自分を出すと、それはもう子どもの時間ではなくなってしまうのである。治療時間のセラピストは、子どもが自分自身をあるがままに見ることができる鏡に徹するべきだと彼女は主張した。セラピストが子どもの遊びに入らず、子どもの鏡になる対応が具体的にはどういうものであるか、記載された事例から以下に検討したい。

セラピストが子どもと一緒に遊んでいるようにみえる場面が 1 つだけある。それは、リチャードから「ぼくとあそんでね」（p. 165）と求められてチェッカーの相手をした場面（p. 165-166）である。セラピストが子どもの求めを断っていないので、一緒に遊んでいるかのようだが、セラピストはゲーム相手としての応答をしていない。「このゲームのやり方を教えたいのね」（p. 165）を繰り返し、子どもの感情の反射をするだけである。このようなセラピストの対応が影響して、子どもは自分からセラピストとゲームをするのをやめ、最終的に、1 人でチェッカーを使って遊んでいる。またチェッカーに関しては、プレイルームに置く遊具の中の唯一のゲームとして彼女は紹介しているが、肯定的に記述していない。「いくらか効果のある道具として使われましたが、気持ちを表現できる、最上の型のあそび道具ではありません」（p. 74）と述べた。

他には、ごっこ遊びにならないようにしている事例がいくつかある。トムの事例（p. 38-70）では、子どもが指人形を手につけて、セラピストに「はい、こっちをみてごらん。いうことをきかなければ、お前を殺しちゃうぞ、いいか」（p. 43）と言い、ごっこ遊びへ誘っているが、セラピストはその人形の声に応答せず、遊びの中に入っていない。セラピストは「その子が誰かを殺したいような気がしているのね」（p. 43）と子どもの感情を反射するだけである。このやり取りが影響して、その後、子どもは家族のさまざまな登場人物を全て 1 人で演じている。ビルの事例（p. 144-147）でも、子どもは人形を使って戦いの場面を展開させているが、セラピストはトムの場合と同様、遊びの中に入っていない。セラピストは「たえずその気持ちを反射」（p. 145）し続けるだけである。

以上から、セラピストが子どもの遊びに入らず、子どもの鏡になる Axline の対応とは、セラピストが子どもの感情を反射することに徹し、遊びの展開に影響しないことであるとわかる。これによって、子どもは自分だけで遊びを展開し、そこに表われたことをセラピストにフィードバックされることによって、自分自身の理解が進むのである。そしてもう一つ別のことが考えられた。以上の事

例では、セラピストが遊びに入らないことによって、子どもは 1 人で遊び、その展開を 1 人で決めている。子どもが 1 人で決めて責任を負うことを Axline が重視したことを考え合わせると、遊びの展開にセラピストが影響して、子どもから 1 人で遊びの展開を決める責任を負うのを妨げないためにも、彼女は一緒に遊ぶのを避けていたと推察される。

２）『開かれた小さな扉―ある自閉児をめぐる愛の記録』（1972）

この著書には、5 歳（プレイセラピー開始時）の男の子であるディブスと Axline とのプレイセラピーの全経過が報告されているが、一緒に遊んでいるようにみえる場面は 1 つだけである。それは、ディブスが誕生日のプレゼントにもらった暗号通信機を持って来て、お互いに暗号の通信文を出し合い、それを解き合う場面（p. 211-212）である。しかし、この 2 人のやりとりに暗号を解くゲーム性はない。ディブスの「ぼくはディブスが好き、あなたはディブスが好き、ぼくたちはディブスが好き」という暗号を Axline が解き、プレイセラピーによって到達したデイプスの気持ちを 2 人で共有するものになっている。Axline からは、6 歳の誕生日が来たばかりのディブスに「あなたはいくつですか？」と暗号を送り、誕生日を喜ぶ彼の気持ちを引き出す対応をしている。これはセラピストの気持ちや考えを遊びの中に入れるのを抑えたものである。

他の注目すべき記述に、ディブスから遊びを手伝うことを求められても Axline がそれに応じなかった場面（p. 89）がある。ボール紙で作った動物を木の台に「つけるの手伝ってくれる？」というディブスからの求めに「さあどうかしら？」と答えており、結局、Axline は手伝っていない。これは、遊びの一部をセラピストが代わりにしてしまえば、子どもが 1 人で行う責任をセラピストが負うことなるため、それを避けたのだと推測される。彼女は、子どもが自分 1 人で行うことを重視したのである。

この著書には、ディブスがプレイルームに水をまいたり、プレイルームから出て、Axline のオフィスに入ったり、近くの教会に行ったり、哺乳瓶を投げて割ったりしたことが報告されている。ディブスの要求を Axline はほとんど拒否していないようである[7]。そのため、2 人が一緒に楽しく遊んでいるかのように錯覚してしまうが、Axline はディプスの遊びの中に入らないようにしている。これを読みとるのはかなり難しいだろう。

以上の 2 冊の著書から、Axline はセラピストが子どもと一緒に遊ぶのを 2 つの理由から避けるべ

---

[7] Axline（1947）が制限したことをディブスはいくつか破っている。Axline はディブスの事例を 1964 年に発表しているが、1947 年の遊戯療法の著書（小林訳, 1959, p. 32-33 では「デプス」と訳されている）で既に言及している。ディブスは Axline がプレイセラピーの実践を始めた初期の事例であり、彼女の制限に関する考えが十分に固まる前のものであった可能性がある。もっとも教会に行ったことと哺乳瓶を割ったことに関しては、最後のセッションだったため Axline が特別に許したことが考えられる。

きであると考えていたことが明示あるいは示唆された。一つは、一緒に遊ぶことは、子どもがセラピストに頼らず、遊びを 1 人で行い、1 人でその展開を決め、その責任を 1 人で引き受けることを妨げるからである。もう一つは、子どもが自分を知ることを妨げるからである。しかしその著書には、セラピストが子どもと一緒に遊ぶのを支持しない Axline の考えは、わかりやすく書かれていないだけでなく、事例から読みとらなければならない部分も多くあった。

（4）ヘイム・G．ジノットの『児童集団心理療法―その理論と実践―』（1965）

Haim G. Ginott は、Axline のプレイセラピーを集団に適用した “*Group Psychotherapy with Children: The Theory and Practice of Play Therapy*”（1961）を発表した。この著書は 1965 年に『児童集団心理療法―その理論と実践―』として日本語に翻訳され出版されている。児童集団心理療法に関する著書であるが、原著の副題に “*The Theory and Practice of Play Therapy*（*プレイセラピーの理論と実践*）” とあるように、プレイセラピーおよびその事例についのて記述が多い。彼は Axline の考えをもとに彼独自のプレイセラピーのスタイルを本書に記述した（Johnson, 2015）。彼の著者は、日本で早期に出版された遊戯療法に関する書籍（深谷, 1971; 高野, 1972; 高野・古屋, 1961; 佐藤・山下, 1978）に引用あるいは参考にされている。以上より、『児童集団心理療法―その理論と実践―』の記述を取り上げ、これを検討する。なお、その引用とページは、中村悦子による 1965 年の日本語訳（第 1 刷）に従っている。

セラピストが子どもと一緒に遊ぶことに関して、彼は「遊ぶべきか、遊ばぬべきか、治療家のジレンマ」（p. 115）を小見出しにし、重要なテーマとして扱っている。そして彼は、セラピストが子どもと一緒に遊ぶことは不利な点が多いことを明確に述べた。その考えを述べる際の具体例として、Dorfman が記載した、ボール投げと十文字並べをあげており、一緒に遊ぶことに関する彼女の肯定的な記述に対する反論を彼は行ったと考えられる。セラピストが子どもと一緒に遊ぶことの不利な点について、彼は「子どもがおとなを同情なしに利用するようになる」（p. 116）と述べた。具体的には、ボール投げを一緒にすると、セラピストはボールを取りに走りまわって治療時間の大部分を過ごしてしまうことになりがちだと指摘している。このようなセラピーになると、セラピストの心の中に「子どもに対する困惑や敵対心」（p. 117）が生じてしまうため、効果的な治療に必要な「子どもと大人との間の相互の尊敬」（p. 117）が形成されず、「治療が停滞する」（p. 116）と主張した。

さらに、子どもが一緒に遊ぶことを求めた場合のセラピストの対応について、Ginott はそれを避ける具体的な方法を紹介した。例えば、一緒にボール投げをするのを求められたら、1 人で壁に投げることを子どもに勧めている。十文字並べを求められたら、「あなたは、私の役になって選び、あなたの役になって選び、1 人で並べてごらんなさい。私はみていましょう」（p. 116）と応答している。

子どもがナイフでセラピストを攻撃しようとしたときは、ボボ人形を指して「ここに、彼に向かってやってごらん。私はみていましょう」（p. 122）と対応している。

以上から、Ginott がセラピストは子どもと一緒に遊ぶべきではないと考えていたことはあきらかである。彼は、一緒に遊ぶと子どもにこき使われてしまいがちであるため、セラピストに子どもへの否定的な感情が生じることを指摘した。この状態になると、治療に必要な相互に尊重する関係が形成されないため、治療が進まなくなると考えたのである。

（５）クラーク・Ｅ．ムスターカスの『児童の心理療法―遊戯療法を中心として』（1968）

Clark E. Moustakas は、Axline の生徒であったが、椅子に座って子どもの感情を反射する彼女のやり方は、彼の子どもとともにいるやり方と一致しないと気づいたと述べている（Moustakas, 1997）。それにより彼は、関係療法と Rank の考えを徐々に取り入れ、実存主義的な立場をとるようになった。Moustakas の著書は複数翻訳されているが、本研究で取り上げるのは、最初に翻訳された“*Psychotherapy with Children: The Living Relationship*”（1959）である。この著書は、日本で早期に出版された遊戯療法に関する書籍（深谷, 1971; 佐藤・山下, 1978; 高野 1972; 高野・古屋, 1961; 玉井, 1976）に引用あるいは参考にされている。この日本語訳である『児童の心理療法―遊戯療法を中心として―』の記述を以下に検討する。なお以下の引用とそのページは古屋健治による 1968 年の日本語への翻訳（1971 年第 3 刷）[8] に従う。

Moustakas は「セラピストは…子どもの計画に参加し、いっしょになって遊ぶこともあるけれど、しかし、子どものすることについていったり、やさしい気持ちで関心をよせながら傾聴したり、あるいは理解したいとねがいながら見まもる場合の方が、ずっと多い」（p. 6）と述べている。つまり、一緒に遊ぶよりも、子どもの遊びを見守り、理解する立場を彼はとっている。このことが記載された事例にも表れており、子どもと一緒に遊ぶ場面もあるが、それを避けようとする場面もある。しかし、どちらを選択するかを判断する基準について彼はほとんど述べていない。

子どもと一緒に遊ぶのを避けようとする場面は次の通りである。子どもから虹を描くように求められてセラピストが「ためらう」（p. 59）ときがある。撃たれてもセラピストが倒れないので「どうして倒れないの」(p. 130) と子どもから言われている場面がある。子どもから「学校ごっこしましょう。いい？　あんたが先生よ」（p. 69）と言われるが、セラピストは子どもの感情の反射を続けて、先生役としての発言をしていない。以上の対応についてはその理由の記述がないが、次の対応には記述がある。子どもが母親人形をセラピストに渡して、それを切るように求めたことに対して、「きみは、自分でやらなくちゃいけないでしょう」（p. 217）と断っている。これについて、この子ども

[8] 6 冊の著書の内、この著書だけ第 1 刷を確認できなかった。

は「自分の退行的行為や敵意的行為について自分ひとりで責任を持って直面したくなかったのだ」(p. 219) と記述していることから、断ったのは、子どもが 1 人で負うべき責任の一部をセラピストが引き受けないためである。

一方、セラピストと子どもが一緒に遊ぶ場面は次の通りである。セラピストへの身体攻撃や時間の終わりなどの制限を破る子どもの場合、子どもから求められた「チャンバラやピストルの撃ちあい」(p. 22) と「チック・タック・トー」[9] (p. 23) に応じている。これは、セラピストと子どもとの関係を維持するため、制限に関すること以外に両者の対立を増やさないようにするためだと考えられる。「買い物ごっこ」(p. 86) を一緒にしたのは、プレイセラピーでずっと敵意や攻撃性を表わしていた子どもが、ようやく肯定的感情を示し始めたときであった。「ピンポン銃…やり投げ、ボール遊び」(p. 194) をしたのは、1 人遊びしかしなかった子どもが、初めてセラピストと一緒に活動するのを望むようになったときであった。

以上から、Moustakas は子どもと一緒に遊ぶのを基本的には避けており、一緒に遊ぶのはそれが必要なときに限っていたと考えられる。一緒に遊ぶのを避ける理由はいくつかあるようだが、子どもの責任をセラピストが引き受けないようにすることのみ記述している。一緒に遊んでいるのは、それが関係を維持するのに必要な場合と、それまでの遊びからの望ましい変化を示す場合であった。

5．考察

Axline (1947, 1964) をはじめとして、Allen (1942)、Dorfman (1951)、Ginott (1961)、Moustakas (1959) の日本語訳において、セラピストが子どもと一緒に遊ぶことがどのように記述されていたかを調べた。その結果、どの著書においてもセラピストが子どもと一緒に遊ぶことは、限られた場合を除いて、支持されていないと考えられた。とくに Axline (1947, 1964) は、セラピストは子どもの遊びを手伝うことも含めて、一緒に遊ぶべきではないと考えていたことが示された。しかしこれらの記述は、Ginott (1961) のものを除いて、明確ではなかった。また著書によって、これらの記述の内容はかなり異なっていた。そこで、取り上げた著書の記述に示された、一緒に遊ぶことの利点と欠点について検討を行う。その後に、Axline (1947, 1964) の著書が、セラピストが子どもと一緒に遊ぶ、日本の遊戯療法のかたちに影響した可能性について検討する。なお、以下の引用は、煩雑さを避けるため発表年を省略した。ただし Axline の著書は 2 冊あるため、どちらか一方からのみの引用の場合はその発表年を記す。

---

9 前述の「三目並べ」である。

（1）セラピストが子どもと一緒に遊ぶことの利点と欠点

セラピストと子どもが一緒に遊ぶことに関して、取り上げた 6 冊の著書で示された利点と欠点を以下に整理（表 1）し、検討を加える。

表 1．セラピストが子どもと一緒に遊ぶことの利点と欠点

著者	セラピストが子どもと一緒に遊ぶことの 子どもおよびプレイセラピーへの影響	評価
Allen、Moutakas	子どもとセラピストの関係を形成・維持する	利点
Dorfman、Moustakas	子どもの遊びの望ましい変化を確かなものにする	
Allen	子どもの個性化を妨げる	欠点
Axline	子どもが自分を知るのを妨げる	
Axline、Moustakas	子どもが責任を引き受けるのを妨げる	
Ginott	子どもに対する否定的な感情がセラピストに生じて治療の進展を妨げる	

注、Allen（1942）、Axline（1947, 1964）、Dorfman（1951）、Moustakas（1959）、Ginott（1961）の日本語の翻訳書から抽出。

1）セラピストが子どもと一緒に遊ぶことの利点

利点については、Allen 以外は誰もはっきりと記述していない。しかし Dorfman と Moustakas が記載した、セラピストが子どもと一緒に遊んだ場面は、一緒に遊ぶことに肯定的な作用がある、限られた状況であると読みとることができた。これらは一緒に遊ぶことの利点であると考えられるため、明記されていないが、ここで取り上げる。

①子どもとセラピストの間の関係を形成・維持する

Allen は、なにもしようとしない子どもに対しては、関係を形成するためにセラピストが子どもとゲームを一緒にすることを勧めた。前述した精神分析の Freud A.（1928）も児童分析の準備段階に一緒に遊ぶことが関係形成に有効であると述べている。この点で Allen は、Freud A. と同じであり、一緒に遊ぶ必要があるのは関係が形成されるまでと考えていた。一方、制限を破る子どもの求めに応じて Moustakas が一緒に遊んだ事例は、関係が切れないようにするためだったと推測された。つまり Allen と Moustakas はどちらも子どもとの関係を重視して一緒に遊んでいるが、その目的とそれが必要な対象や状況は異なっている。Allen は関係形成を目的に一緒に遊んでおり、それは遊べない子どもと関係ができるまでであった。それに対し、Moustakas は関係維持を目的に一緒に遊んでおり、それは一部の関係の維持が難しい子どもたちに対してであった。

②子どもの望ましい変化を確かなものにする

Dorfman と Moustakas が報告する一緒に遊んだ事例は、子どもが求めた遊びが、その子どもにとって以前よりも望ましい場合であった。セラピストがそれに応じたのは、この望ましい変化を失われないようにし、確かなものにするためであったと推測された。Dorfman の事例では、一緒に遊んだ後に、現実場面でも子どもに適応的な変化が生じたことも報告されている。

２）セラピストが子どもと一緒に遊ぶことの欠点

欠点については、全て記述されていると考えられ、それらを取り上げた。ただし、Axline が記述した、子どもの責任を引き受けないようにするために一緒に遊ぶことを避ける範囲に関しては、記述されたよりも幅広く、事例から読みとれた推測も加えた。

①子どもの個性化を妨げる

これは Allen のみが主張したことである。Allen は、子どもがセラピストとは異なる人格であることを体験する分化が必要であると考えた。そのため、セラピストが子どもの投影を引き受けて、ごっこ遊びの中でさまざまな役割をすると、子どもは自分とセラピストの違いを体験できなくなると述べた。違いを体験できない子どもはセラピストとの間の分化が進まなくなり、その個性化が妨げられると主張した。Dorfman と Axline、Ginott、Moustakas もごっこ遊びを避けていたが、それと個性化との関係については述べてない。

②子どもが自分を知ることを妨げる

Axline（1947）は、セラピストが子どもの遊びの中に入って、その考えや感情などを表すと、子どもの自己理解を妨げると考えた。これを防ぐため、セラピストは遊びの中に入らないようにすべきだと主張している。彼女は遊びの中に入らず、遊びに影響せず、子どもだけで遊びを展開できるようにし、遊びに表われた子どもの感情を反射することで、子どもの自己理解を促進した。Dorfman と Moustakas、Ginott も子どもの感情の反射を行っているが、セラピストが子どもの遊びの中に入ることが子どもの自己理解の妨げになることを述べていなかった。

③子どもが責任を引き受けることを妨げる

Axline（1947）は、なにもせず、一言も話さない子どもにセラピストが遊ぶものを選んで、一緒に遊ぶと、子どもがセラピストにずっと頼ってしまう問題が生じると指摘した。責任を重視した Axline にとって、一緒に遊ぶことは、子どもが 1 人で遊ぶ責任を引き受けるのを防げるものであり、避けるべきことだったと考えられる。Moustakas は、遊びの一部を代わりに行うように求めたのを、

子どもが責任を一人で全て引き受けることから逃げるものであるとし、セラピストが断わる場面を記述した。このように、一緒に遊ぶのを避けるべき点に関して、Axline と Moustakas はそれぞれ異なる、限られた状況を記述した。しかし事例からは、Axline は一緒に遊ぶことをもっと幅広く、子どもが遊びを 1 人で行う責任だけでなく、その展開を一人で決める責任も引き受けるのを妨げるものと考え、避けていたことが推察された。一方で、Allen も子どもの責任を重視したが、彼はセラピストが子どもの遊びを決めないことを主張しただけであり、一緒に遊ぶことと責任との関係については述べていない。

④子どもに対する否定的な感情がセラピストに生じて治療の進展を妨げる

Ginott は、一緒に遊ぶと、子どもはセラピストをこき使いがちであるから、子どもに対して否定的な感情がセラピストに生じ、それが治療の進展を妨げると主張した。Axline（1964）がディブスの遊びの手伝いをしなかったこと、Moustakas が子どもがすべき遊びを代わりにしなかったことは、Ginott が指摘するこの問題が生じるのを防ぐ対応にもなるだろう。子どもの遊びの要求や期待に応じると、それはエスカレートして、やがてセラピストの負担になる可能性が高いからである。この点で、子どもがセラピストに頼って責任を回避することと、セラピストに負担になって否定的な感情が生じることは、一緒に遊ぶことに伴う、同じ欠点の表裏の関係であると考えられる。

以上みたように、Allen、Dorfman、Axline、Ginott、Moustakas の著書には、セラピストが子どもと一緒に遊ぶことの 2 つの利点と 4 つの欠点が示されていると考えられた。利点については、その多くが明記されておらず、事例から推測されたものである。さらに、一緒に遊ぶことが必要な時期や子どものタイプ、遊びの内容は限定されていると考えられた。総じて、一緒に遊ぶことについては、利点よりも欠点が多く示されていた。しかし著書によって利点と欠点に関する記述の内容は異なっており、Axline と共通する記述は少なかった。Axline（1947）が指摘した欠点は 2 つあるが、一方が Moustakas と一部共通していただけであった。利点については、Axline は述べなかったが、Allen と Dorfman、Moustakas の記述から 2 つの利点を確認するか読みとることができた。以上から、セラピストが子どもと一緒に遊ぶことに関する他の著書の記述は、Axline の記述との相違点が多いことから、Axline の著書を読む上で、助けになるよりも、むしろ妨げになった可能性があると考えられた。

（2）Axline のセラピストが子どもと一緒に遊ぶ日本の遊戯療法への影響

日本の遊戯療法の形成に大きく影響した Axline は、仮説と違い、セラピストは子どもと一緒に遊

ぶべきではないと考えていた。この点で Axline は、前述した Freud A. よりも Klein 派に近いといえる[10]。また本研究で取り上げた他の著書も、限られた場合を除いて、一緒に遊ぶことを支持していなかった。したがって、セラピストが子どもと一緒に遊ぶ、日本の遊戯療法のかたちに Axline の考えが影響したことは考えられなかった。また他の著書が影響したことも考えられなかった。しかし、子どもと一緒に遊ぶことを避ける Axline の考えが日本の遊戯療法に取り入れられなかったのは一体なぜだろうか。本研究からこの要因として 2 つ推測することができるだろう。第 1 に、Axline のこの考えについて、その存在自体が認識されなかったこと、認識されても、それが重要であると理解されなかったことである。第 2 に、Axline のこの考えが認識され理解されたとしても、その実施が難しかったことである。この 2 つの要因を以下に検討する。

第 1 の要因である、Axline の考えが認識 / 理解されなかったことの原因は 2 つあるだろう。まず、一緒に遊ぶことに関して、Axline の著書の記述はあまり明確ではないからである。彼女の記述は、本研究が試みたように、一緒に遊ぶ点に焦点をあてて読み込まないと、その考えが認識 / 理解されない可能性がある。次に、前述したように、他の著書の記述が Axline の考えを正確に認識 / 理解するのを妨げた可能性もあるからである。たとえば、Axline（1947）より早く日本に紹介された、Allen と Dorfman が子どもと一緒に遊ぶ場面を記述し、その肯定的な側面を報告したことは Axline（1947）の記述の認識 / 理解に影響したかもしれない。とくに Allen は遊べない子どもと将棋（チェッカー）をしており、Axline（1947）も子どもから求められてチェッカーにつきあっている場面がある。これらの記述から、遊戯療法では、一緒にゲームをしてもよいと日本で認識 / 理解されたかもしれない。Axline（1947）の後に日本に紹介された Ginott は、一緒に遊ぶべきではないと明確に述べたものの、その理由は Axline（1947）のものと異なっていた。その後に紹介された Moustakas は、一緒に遊ばない理由について Axline（1947）の考えと一部共通していたが、その記述は事例の中で示されたものであり、はっきりしたものではなかった。彼の著書には、その事例を詳細に読めば、一緒に遊ぶことを避けていることがわかるが、一緒に遊ぶこともあると述べられ、一緒に遊ぶ事例も記載されていた。したがって Ginott と Moustakas の記述は、Axline（1947）の考えの認識 / 理解にあまり役立たなかっただろうし、彼女の考えに対して既に形成されていた認識 / 理解を修正することもできなかったであろう。

[10] Axline と Klein 派とは、セラピストが子どもと一緒に遊ばない点は同じであるが、本文に示したように、その理由は異なっている。また、Axline は子どもの内的世界に注目し、それを理解するものの、Klein 派と違い、それを言葉にしない。たとえば、ディブスが父と母、妹に敵意をもっていることを 3 人の兵隊を砂に埋めることで表現し、それを Axline は理解しているが、それを言葉にしていない（Axline, 1964）。その理解のしかたも、Axline は子どもの過去から歴史的な意味を捉えようとするものではない点で Klein 派と異なる。Axline は、外にはっきりと表われた、遊びの内容と子どもの感情だけを言葉で映し返している。本研究で取り上げた他の著書もほぼ同様であるが、Allen（1942）だけは、多くはないものの、子どもの内的世界を言語化（解釈）することがある。

第 2 の要因については次のことが考えられる。Axline の考えを実施するには、子どもの遊びの中に入らないように気をつけなければならない。それには、Axline と Dorfman、Ginott、Moustakas が行ったような、子どもの感情を反射することが求められる。さらに Axline と Ginott、Moustakas が示したように、子どもから一緒に遊ぶことを求められても、それに応じないようにしなければならない。これらを忠実に行うことはかなり難しかったであろう。

６．今後の課題

本研究では、セラピストが子どもと一緒に遊ぶ遊戯療法が日本で形成された要因は、日本の遊戯療法に最も影響した Axline のプレイセラピーにあると考え、その著書の日本語訳を調べた。しかし彼女はセラピストが子ども一緒に遊ぶことを支持していなかった。一緒に遊ぶことに関して、彼女の考えは日本の遊戯療法とは正反対のものであった。日本の遊戯療法に影響した可能性のある、他の 4 人の著書の日本語訳においても全体的に Axline と同様の考えであり、これらが一緒に遊ぶかたちに影響したとは考えられなかった。それにもかかわらず、日本の遊戯療法が一緒に遊ぶかたちになった要因として、Axline の考えが日本で認識 / 理解されなかったことと、その実施が難しかったことが推測された。この推測については、Axline が紹介された時期の日本の文献を調べることで確かめられるだろう。しかし Axline の考えが認識 / 理解されなかったことやその実施が難しかったことは、一緒に遊ぶかたちの形成を遮らなかった要因にすぎない。これらを確認するだけでは、このかたちが日本に形成されるのを積極的に後押しした要因があったとしても、それをあきらかにできない。

したがって今後の課題は、遊戯療法に関する日本の初期の文献などを調べることで、セラピストが子どもと一緒に遊ぶかたちがどのように形成されたのかを調べてあきらかにすることである。そこには、精神分析の考えの影響と Axline の考えに関する日本での認識 / 理解と実施についての調査も含まれるだろう。

引用文献

Allen, F. H.（1942）*Psychotherapy with Children*. New York: W. W. Norton & Company.（黒丸正四郎（訳）（1955）問題児の心理療法　みすず書房.）

安島智子（2010）遊戯療法と子どもの「こころの世界」　金子書房.

飽田典子（1999）遊戯法―子どもの心理臨床入門　新曜社.

Axline, M. V.（1947）*Play Therapy: The Inner Dynamics of Childhood*. Cambridge, MA:

Riverside Press.（小林治夫（訳）(1959) 遊戯療法　岩崎出版社.）

Axline, M. V.（1964）*Dibs: In Search of Self*. Boston, MA: Houghton Mifflin.（岡本浜江（訳）（1972）開かれた小さな扉―ある自閉児をめぐる愛の記録 リーダース・ダイジェスト.）

Chethic, M.（1989）*Techniques of Child Therapy Psychodynamic Strategies*. New York: The Guilford Press.（斎藤久美子（監訳）　名取琢自・吉岡恒生（訳）(1999) 子どもの心理療法―サイコダイナミックスを学ぶ　創元社.）

Dorfman, E.（1951）Play Therapy. In C. R. Rogers *Client-Centered Therapy*. 235-277. Boston: Houghton-Mifflin.（友田不二男（訳）(1956)　遊戯療法. ロージァズ選書 3　遊戯療法・集団療法 2-69. 岩崎書店.）

Freud, A.（1928）The Theory of Child Analysis. In *Writings of Anna Freud. Volume 1, Introduction to Psychoanalysis: Lectures for Child Analysts and Teachers* 1922-1935. 162-175. London: Hogarth and Institute of Psycho-Analysis（1974）.（岩村由美子・中沢たえ子（訳）(1981)　児童分析の理論 牧田清志・黒丸正四郎（監修）アンナ・フロイト著作集 第 1 巻 児童分析入門　155-167. 岩崎学術出版社.）

Freud, A.（1946）*The Psycho-Analytical Treatment of Children*. London: Imago.

Hug-Hellmuth, H. Von（1921）On the Technique of Child-Analysis. *International Journal of Psychoanalysis*, **2**, 287-305.

Geissmann, C., & Geissmann, P.（1998）*A History of Child Psychoanalysis*. London & New York: Routledge.

Ginott, H.（1959）The Theory and Practice of Therapeutic Intervention in Child Treatment. *Journal of Counseling Psychology*, **23**, 160-166.

Ginott, H. G.（1961）*Group Psychotherapy with Children: The Theory and Practice of Play Therapy*. New York: McGraw-Hill.（中村悦子（訳）　(1965)　児童集団心理療法　新書館.）

後藤毅 (1955) 緘黙的障碍に因る緘黙児に対する心理療法の一事例. 大阪市立大学家政学　部紀要 (児童学), **3** (5), 249-253.

深谷和子（1971）幼児・児童の遊戯療法 黎明書房.

古屋健治（1966）児童心理療法（遊戯療法）の理論とその課題. 山梨大学教育学部研究報告 , **17**, 141-148.

東山紘久（1982）遊戯療法の世界―子どもの内的世界を読む― 創元社.

東山紘久・伊藤良子（編）(2006) 京大心理臨床シリーズ 3 遊戯療法と子どもの今 創元社.

弘中正美（2002）遊戯療法と子どもの心的世界 金剛出版.

弘中正美（2014）遊戯療法と箱庭療法をめぐって 誠信書房.

Johnson, J. L.（2015）The History of Play Therapy. In K. J. O'Connor, C. E. Schaefer, & L. D. Braverman（Eds.）*Handbook of Play Therapy 2nd Edition*. 16-34. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.

木部則雄（2006）子どもの精神分析―クライン派・対象関係論からのアプローチ― 岩崎学術出版社.

河合隼雄・山王教育研究所（編著）（2005）遊戯療法の実際 誠信書房.

Klein, M.（1932）*The Writings of Melanie Klein Vol.2 The Psycho-Analysis of Children*. London: Hogarth Press（1975）.（小此木啓吾・岩崎徹也（責任編訳）衣笠隆幸（訳）（1997）　メラニー・クライン著作集 2 児童の精神分析　誠信書房.）

Moustakas, C. E.（1959）*Psychotherapy with Children: The Living Relationship*. New York: Harper & Row.（古屋健治（編訳）（1968）　児童の心理療法―遊戯療法を中心として― 岩崎学術出版社.）

Moustakas, C.（1997）*Relational Play Therapy*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield.

村瀬嘉代子（1995）子どもと大人の心の架け橋　金剛出版.

村瀬嘉代子（1996）子どもの心に出会うとき―心理療法の背景と技法―　金剛出版.

永井徹（2005）子どもの心理臨床入門　金子書房.

長尾憲彰（1955）吃音児の心理療法の経験. 大阪市立大学家政学部紀要（児童学）, **3**（5）, 239-247.

丹羽郁夫（2014）最初の児童分析家ヘルミーネ・フークーヘルムートの児童分析の技法. 現代福祉研究 , **14**, 73-94.

Ogawa, Y. & Takai, M.（2017）Play Therapy in Japan. In Angela, F. Y. Sue & Alicia K. L. Pon（Ed.）*Play Therapy in Asia*. 117-152, Hong Koung: The Chinese University Press.

Plastow, M.（2011）Hermine Hug-Hellmuth, The First Child Psychoanalyst: Legacy and Dilemmas. *Australasian psychiatry*, **19**（3）, 206-210.

佐藤修策・山下勲（編）（1978）講座心理療法 2　遊戯療法　福村出版.

Segal, H.（1973）*Introduce to the Work of Melanie Klein*. London: The Hogarth Press.（岩崎徹也（訳）（1977）　メラニー・クライン入門 岩崎学術出版社.）

高野清純（1972）講座 心理療法 第 5 巻 遊戯療法の理論と技術　日本文化科学社.

高野清純・古屋健治（1961）遊戯療法 日本文化科学社.

竹内健児（2019）Q & Aで学ぶ遊戯療法と親面接の考え方・進め方　創元社.

丹明彦（2019）プレイセラピー入門―未来へと希望をつなぐアプローチ　遠見書房.

玉井収介（1976）心身障害教育シリーズ 遊戯療法の理論と実践　教育出版株式会社.

田中秀紀（2015）遊戯療法理論の現状と今後の展望. 広島国際大学心理臨床センター紀要, **14**, 1-19.

田中千穂子（2011）プレイセラピーへの手引き―関係の綾をどう読みとるか 日本評論社.

東畑開人（2017）日本のありふれた心理療法―ローカルな日常臨床のための心理学と医療人類学 誠信書房.

鵜飼奈津子（2010）子どもの精神分析的心理療法の基本 誠信書房.

山崎晃資（1995）子どもの「遊び」とプレイ・セラピー．山崎晃資（編), プレイ・セラピー 17-42. 金剛出版.

吉田弘道・伊藤研一（1997）遊戯療法――2 つのアプローチ サイエンス社.